

○久保田 真弓 草野 篤子 (信州大)

【目的】 明治・大正時代は、女性が職業につくことは少なく、女子教員は、女子の教育をするために必要であると例外的に認められた存在であった。しかし、東北帝国大学において女性の門戸開放を行った澤柳政太郎は、女子教員の存在を積極的に評価している。そこで本研究は、澤柳政太郎の女子教員についての業績に分析を加えることで、澤柳の女子教員観を明らかにすることを目的とする。

【方法】 方法として、澤柳が明治・大正期に著述した女子教員に関する論文、澤柳政太郎全集全10巻、婦女新聞、教育時論、及び成城大学教育研究所所蔵の澤柳私家文書を通して澤柳の女子教員観について分析、考察を行った。

【結果】 澤柳政太郎は、児童が心身共に健全な発達をすることが教育上最も重要だと考え、児童の教育には、「愛情」が必要であると主張した。澤柳は、「女子教員は児童の人格を尊重することができる」との持論から、女子には小学校教員の適性があるとし、教員の数を男女半々にすべきであると主張した。そして教員の職務上の責任や仕事は、男女に差がないにもかかわらず、待遇に差を設けることに疑問を示し、女子教員の待遇改善を求めた。女子教員が、男子教員に劣ると考えられているのは、偏見や伝統的習慣によるものであり、根拠がないことを指摘している。さらに女子教員の能力は、男子教員のそれと比べて劣っているという考えに対して、澤柳は、教員の養成上に問題があり、性による差が原因ではないと主張した。大正5年に、澤柳が会長の帝国教育会によって女子教員に関する全国的なアンケート調査を行っている。